様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　　4 月　　30 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：　　２００８～２００９
課題番号：２０８３００３３
研究課題名（和文）多様な障害をあわせ有する盲ろう児の共同的活動の成立・展開に関わる実践的研究
研究課題名（英文）　Action research of joint activities of children whit deafblindness and severe disabilities

研究代表者　中村　保和　（NAKAMURA　YASUKAZU　）
福井大学　教育地域科学部　講師
研究者番号：60467131

研究成果の概要（和文）：本研究では、盲ろう児とのやりとりの間に「共同注意」を見いだす試みとして、数名の盲ろう児を対象に、対象児との共同的活動を目的とした働きかけを実行した。分析に際しては、働きかけの経過を記録したビデオ映像記録を詳細に分析した。その結果、係わり手と対象児との間には、数種の共同注意行動のパタンが見いだされるとともに、それぞれが関連してより高次の共同注意行動へと変化していることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present study was to clarify a development process of joint activity. And making an operational definition of joint tactile attention through a qualitative change of ″contact″ between things of a assistant and deafblind child. I took out a lot of episodes from video picture record that recorded guidance progress. As a result of having classified these episodes by qualitative change of ″contact″, a joint attention of different models was found.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,050,000	315,000	1,365,000
2009 年度	280,000	84,000	364,000
総　計	1,330,000	399,000	1,729,000

研究分野：特別支援教育(重度・重複)
科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育
キーワード：盲ろう児　共同的活動　共同注意

１．研究開始当初の背景

申請者（以下「筆者」と記す）は、盲ろう児に対する教育実践研究を長期・継続的におこなってきた。その経過において、従来から盲ろう教育の分野で課題とされてきた「共同的活動の成立・展開」に対し、「共同注意」という新たな視点を設け、実践資料の蓄積を行ってきた。特に、盲ろう児とのやりとりにおいては、触覚を介したやりとりが主となるために、盲ろう児に対する教育実践の経過の中で生じた肌の触れ合いの質的変化に着目する必要があり、その際に、触覚による共同注意の操作的定義を作成する試みを行った（中村・川住，2007）。しかしながら、共同

的活動が係わり手と対象児との間に生じるための諸要因については十分に明らかにすることができず、とりわけ、生じた共同注意行動がどのようにして高次の共同注意行動へと移行していくかについては、さらなる検討課題となった。

２．研究の目的

本研究の目的は以下の２点である。すなわち、第１点目は、視覚聴覚二重障害の子ども(以下、「盲ろう児」と記す)と係わり手との間で生じる共同的活動の成立・展開について、共同注意という新たな視点から明らかにすることである。第２点目は、盲ろう児が係わり手と活動のテーマを共有するための援助の在り方、すなわち、かかわり手側の在り方について実証的に明らかにすることである。

３．研究の方法

(1)対象児Ａ：17 歳当時

運動障害等はみられず生活の場(重症心身障害児施設)において慣れ親しんだ場所では自由に移動することができる。日常生活動作に関する数種の身振りサインを理解する。視覚的には全盲で、強い光に対して顔を近づける様子がみられる。聴覚的には内耳形成不全との診断を受けており、聴覚レベルは 90dB である。補聴器の装着は嫌がる。筆者(以下Ｉと記す)が係わり合いを開始して約 2 年が経過した頃から、Ａは、医療用絆創膏(以下、テープと記す)を施設内の壁や玩具、段ボール箱、医療用スタンドなどに貼り付ける活動を活発に行うようになり、これらの対象物にＩと一緒にテープを貼り付けるといった活動が、毎回の活動として定着するようになった。

(2)分析資料および方法

ここでは、テープ貼り活動が定着したＸ年 12 月～X＋2 年 8 月におけるビデオ映像記録(全 48 セッション:1 セッションあたり約 2 時間)の中からテープ貼り活動の取り組み時間(持続時間)が最長となったエピソードを１つ取り出して分析を行った結果を報告する。

Table 1　やりとりにおける共同注意行動の変化

	やりとりの性質	共同注意の型	予測行動の有無
応答的	一方からの働きかけに応答する(I→A)	支持受容型共同注意	－
		追跡型共同注意	－
双方向的	働きかけに対する応答が循環する(I→A→I)	誘導型共同注意	±
	循環が活発になる(I→A→I→A→・・・)	意図共有型共同注意	＋

注)　記号　－　ほとんど生起しない　±　かろうじて生起する　＋頻繁に生起する

４．研究成果

(1)共同的活動の持続時間

共同的活動として定着したテープ貼り活動は、全 48 セッション中 37 セッションで行われた。平均取り組み時間は 19 分 41 秒であり、最短時間は 10 分 16 秒、最長時間は 28 分 21 秒であった。

(2)エピソード(X＋1 年 10 月)

Ａは、Ｉからテープを受け取ると、傍の段ボール箱を引き寄せて、それにテープを貼り付けていった。ＩはＡがどのように段ボールに貼り付けようとしているのか(貼り付けの

イメージ)を読み取ろうと、しばらくその様子を見守った。すると、Aが段ボール箱の側面を繋げるようにテープを巻き付けていることに気付いた。そこでIは、Aの手に自らの手を被せるようにしてテープ貼りをガイドした。するとAは、手の力を抜いてガイドを受け入れた(支持受容型共同注意)。また、IはAの手の中にあるテープに触れながらテープ貼りを先導するようにテープを貼り進めると、AはIの貼り進めるテープを手で辿るようになった(追跡型共同注意)。貼り進める中で、段ボールの角に当たると、AはIの手を押し出して貼り付ける方向へとIの手を誘導した(誘導型共同注意)。こうしたやりとりが進行した後、Aはテープから手を放し、段ボール箱を両手で持って回転させた。Aが段ボール箱を両手で持ちながら回転させ、Iはそれに合わせてテープを引き出していくという形になった(意図共有型共同注意)。Aは時折、テープの貼り口に手を伸ばして確認し、段ボール箱を回転させた。

(3)やりとりにおける共同注意行動の変化

上記のエピソードをやりとりにおける共同注意行動の変化という観点からTable 1に整理した。共同注意行動の型の分類については中村・川住(2007)で作成された操作的定義をもとに行った。一連の共同注意行動の変化は、Iの働きかけを始発とし、より高次の共同注意行動まで変化していった。こうした結果は、AとIとのやりとりが応答的な関係から双方向的な関係へと移行したことを意味する。この関係の変化、すなわち、追跡型共同注意から誘導型共同注意への移行は、AがIの振る舞いや動作を予測することによってもたらされた。またこのことは、係わり手側から言えば、Aの予測行動を発現させるような働きかけが求められることを示唆する。その際にIは、①テープを貼る時に、ある法則性を持った貼り方を行うことでAの予測行動を促し、② 予測行動が安定した際には、Aの予測から若干逸れた貼り方を試み、Aの注意行動(注意の分配)が集中度の高いものになる(飽和状態を避ける)ようにすることを意識的に行った。これら2点は、追跡型→誘導型→意図共有型→追跡型→誘導→・・・という共同注意行動の循環を作りだし、共同的活動を持続する要因となった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０　件）

〔学会発表〕（計１　件）
<u>中村保和</u>・川住隆一、盲ろう児とのやりとりにおける共同注意行動の変化の要因-やりとりの循環と係わり手の役割に着目して-、日本特殊教育学会第47回大会発表論文集、2009年9月、p215.

〔図書〕（計　０件）
〔産業財産権〕
○出願状況（計０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

中村　保和　（NAKAMURA　YASUKAZU　）

福井大学　教育地域科学部　講師

研究者番号：60467131

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者